

Critical Thinking から パラグラフ・ライティング へ

加納なおみ
(東京水産大学)

．主なトピック

パラグラフとは？ パラグラフと段落の違い，国語教育の中での位置づけ，など
パラグラフライティングの特長
大学生に対する作文教育への応用の可能性：critical thinking との関連
パラグラフライティングの具体的な方法
従来型
critical thinking を重視したアプローチ
日本語におけるパラグラフライティングの問題点と今後の課題

．内容

1．パラグラフと段落

パラグラフに対する誤解，軽視

パラグラフは単なる句読法ではなく，思考の整理法，そしてそれを表現する枠組みである。

国語の教科書の問題点

曖昧な「段落」の定義

“長くなったら，適当に切る。”，“関連性のある文章のひとかたまり”など

「段落」を展開する方法の不備

“トピックセンテンス”を紹介しているテキストは出てきたが，それをどのように支持，説明していけばよいかは，具体的に述べられていない。“トピックセンテンス”という名称に言及している点は新しいが，これだけでは「説得力」のある段落を作り上げる具体策にはなっていない。

英語教育におけるパラグラフライティングの伝統とその文化的背景

アリストテレス式レトリック

長い伝統のなかで、高度に様式化しており、欧米のライティング教育においては常識となっている。

Critical thinking を取り入れたパラグラフライティング 今回の中心

時代の変化と共に、“読み手”とのコミュニケーションをより重視したアプローチへの要請が高まる。アカデミズム、ビジネスのニーズを満たし、英語以外の言語への応用も十分可能だといわれている。

2. パラグラフライティングの特長

推敲段階において、ディスコ・ス及び、全体の構成レベルで、明確なルールを与える。

印象ではなく、かなり客観的な評価基準を備えている。

「形式」が決まっているぶん、書き手、読み手共に、「内容／ポイント」そのものに注目することができる。

パラグラフライティングへの批判／誤解

パラグラフライティングは、形式的である、ルールが多すぎて書き手の自由を奪う、などと批判されることがある。

パラグラフライティングのアプローチは、確かに、人間の自然な思考の流れには相反する部分が多い。特に、慣れるまでは、抵抗感を抱く書き手も少なくない。

実際、「結論先行型」のコミュニケーションスタイルを好むといわれる英語話者でも、初めからできるわけではなく、また、完全に習得するのは難しい、といわれている。

しかし、読み手にとってはポイントをつかみやすいスタイルなので、その点をコミュニケーションの重要な目的と考える英語のレトリックでは、パラグラフライティングの習得は常識になっている。このことから、書き手の便宜（一時的、表面的なものではあるが）と、読み手の便宜のどちらをより優先すべきか、という問題が浮上してくる。

3. パラグラフライティング + critical thinking / critical reading

大学生に対する作文教育への応用の可能性

コミュニケーション能力の低下、思考力の欠如という問題に対処する一方法たりうる。

なぜか？

コミュニケーション能力を伸ばす

「読み手」の存在を明確に意識し、読み手の反応を予測しながら書くことによって、読み手と理解し合うことを目的として書く、という姿勢が養われる。

思考力を育成する

リサーチ段階で資料を読む時から，critical な読解が要求される。

単なる要約を目的とするような読み方では，明確な問題提起は難しい。また，「知識」だけでなく，「論理」で読む必要がある。これらは，推敲段階で自分の文章を読み返し，問題を発見するときにも，不可欠な読みのスキルである。また，ルールに沿ってパラグラフを書き進める過程で，さらに様々な角度から，自説の吟味，分析を行う必要があるので，思考力の養成が可能となる。

4．パラグラフライティングの具体的な方法

従来型（BC4C の アリストテレス式レトリックにさかのぼる）

空間配列，時間的順序，過程と指示，例示，言い直し，分類，定義，比較，対照，説得，原因・結果 など，一定のパターンに沿って書く。日本でも英語教育では取り入れられている。日本語のライティングに関する手引書でも，すでに紹介されている。

critical thinking を重視したアプローチ（20C，言語分析哲学者 S. Toulmin による）

問題解決型の立論を基本とするため，説得力が不可欠な文章に最適。英語の論文では，解決案を提示する過程で，に挙げたパラグラフ展開の諸パターンのうち，論旨にふさわしいものを，適宜取り入れて組み合わせる。

基本型

序論： 問題提起 → 解決案（＝主張）

本論： 証明： 主張の内容を，下位分類，分割し，各パラグラフで段階的に正当性を立証していく。

結論： 総括，今後の課題の提示 など

序論で問題解決のための主張を具体的に述べ，その限界も明確にすることにより，書き手と読み手の間に「契約」を交わす。書き手は，読み手に対し証明すると約束した内容について，続く本論で，過不足なく説得力のある議論を展開する。

証明に必要な論拠が十分示せないと判断される場合は，再度，序論に戻って，主張を絞り込み，本論中の論旨と整合するよう，調整して書き直せば良い。

各パラグラフには，基本的に， point claim（主張） reason（主張の理由づけ） evidence（外部からの引用。主張及び理由づけの正当性を証明するための論拠となるデータ） warrant（論拠から主張を導き出すための裏付けとなる，より一般的な価値観）を含む。

はいわば個人レベルの推論によって導き出されるポイントだが，を含むことにより，客観性・説得力を高め，個人の価値観にとどまらない次元での議論を全パラグラフで展開することをねらいとする。

5 . 日本語におけるパラグラフライティングの問題点と今後の課題

文化的な抵抗：“書き手責任” vs . “読み手責任” (Hinds の定義より)

“書き手”がすべて言い尽くすスタイルより，“読み手”がポイントを読み取ってくれることを期待する伝統的な文章観 “異文化間コミュニケーション”では，理解されにくい考え方。

“異文化”について，日本人の間でも再定義が必要ではないか？

外国人だけが“異文化”ではない。変動が激しく，価値観が大きく変わっていく時代に教育を受けてきた今の大学生は多くの教師にとって，“異文化”的な存在とも言える。また，同様に，日本人でも，世代や生育環境が大きく異なる者同士では，互いを“異文化”的存在とはっきり認識し，それにふさわしいコミュニケーションスタイルをとった方が，むしろ理解を深め合えるのではないか。

“ポイント先行型”(演繹型)の文章に対する抵抗感

日本語では，結論を先に述べるスタイルに対し，文化的に抵抗が強いといわれている。

最近では，英語圏からも，演繹型の議論を日本人留学生に強制すべきではないと述べる研究者すら出てきた。しかし，発表者の大学で先日，学生アンケートを実施したところ，学習者からの反応は，“ポイント先行型”に対し，概ね肯定的だった。興味深い感想が得られたので，ここに紹介する。

ポイント先行型文章についてのリサーチ結果，主な回答：

読み手としてはポイントをつかみやすいが，書き手としては書きにくい

書き手としても，目標がはじめに設定できるので，論旨が逸脱するのを避けられる

など。

パラグラフライティングでは，ポイント後置型(帰納型)も同様に認めている。因みに英語のパラグラフライティングでは，帰納型は，読み手の興味を最後まで引きつづけるのは非常に困難なので，危険だといわれている。よって，結論に対し，強く反発する読者層の存在が明らかに予想される場合以外，このパターンは奨められていない。いずれにせよ，上級のライターは，いろいろなテクニックを用いることができるので，必ずしもポイント先行型で書く必要はないが，初心者，中級者には，上記のリサーチ結果からも，ポイント先行型はおすすめのパターンといえる。

ポイント先行型文章が書きにくいと考えられる真の原因は，心理的な抵抗より，ポイントが明確になるまで書き直さなければならない，つまり，ポイントが明確になるまで考えなければならない，という部分にあると思われる。しかし，これにより，文章を書きながら，思考力を鍛えることができ，書き手の論理構築力を伸ばすことができるの

である。そのためにも、今後、日本人の大学生に、自分の文章を繰り返し推敲する必要性、そしてその重要性を教えていかなければならない。

「思ったことを何でもはっきり言う」と「結論から言う」は違う。日本では、文化的にこの二つが混同される傾向がある。表現教育、特に作文教育に携わる者は、この両者の区別を学習者に明確に伝えていく必要がある。

主な参考文献

Booth Wayne C., Gregory G. Colomb and Joseph M. Williams. *The craft of research*.
Chicago: The University of Chicago Press, 1995.

Connor, Ulla. *Contrastive rhetoric: Cross-cultural aspects of second-language writing*.
New York: Cambridge University Press, 1996.

Hinds, J. "Reader versus writer responsibility: A new typology." In *Writing across languages: Analysis of L2 text*, edited by U. Connor and R.B Kaplan, Addison-Wesley, 1987.

Toulmin, S. *The uses of argument*. Cambridge: Cambridge University Press, 1958.

Williams, Joseph, M. *Style*. Chicago: The University of Chicago Press, 1990.